

インド文化研修レポート

1.プログラム全体について

今回この国際文化研修プログラムでインドに初めて行くことになった。この研修が決まるまでインドについてあまり印象がなかった。数学に強く人口が多い国であるということしか知らなかった。そのためインドに行く前に少しでもインドのことについて知ろうと調べてみた。しかし、調べれば調べるほどインドに対して悪い印象が増えていくことになった。それはインドに定着しているカースト制度による差別が根強く残っていること、またインドに行った人はあまりにも環境や習慣が異なるため、インドのことをものすごく好きになるか二度と行きたくないというかのどちらかしかないというほど極端に好みが分かると聞いたからだ。私は海外には小さいときに一度しか行ったことがなかったので適応することが出来るかどうか不安の一つであったし、好き嫌いの差が激しく食や気候が体に合うか心配であった。しかし実際に行ってみると杞憂であった。インドの学生たちはとても私たちや日本の文化に関心を持ち、親切に対応してくれた。差別が残っているという話は聞いていたが、私たちが滞在した間、特に大きな差別のようなものを感じることはなかった。もちろんインド社会の深くまで入り込んでないから当たり前ではあるが。インドに到着してホテルへの移動している間感じたことは、懐かしさのような何かと人間が生きているという実感だった。もちろんインドに来たことはないのだから、懐かしいということはないのだが、しかし空港から出た時の空気、車の中から見た人々の賑わいなど温かみを感じた。車の中で信号待ちをしているとき、歩いていた人がこちらに手を振ることが何度もあった。この人懐っこい雰囲気は近年の日本においてはほとんどないだろう。道はごみや野犬があふれ、日本ではまず嗅ぐことのない匂いで満ちていた。車はすべてクラクションを鳴らしながら、車線など関係なしに進んでいた。目に見えるすべてが日本とは違うものに見えた。それに対して驚きはあったものの不快感はなかった。それはインドではこれが普通だからだ。町にはたくさんの方が生活していた。町を歩いたり車の移動中、人々の生活が垣間見えた。日本では無機質に感じたものが、インドでは生きているように感じた。うまく言葉にすることが出来ないのだが、町の景色や人、食べ物、匂い、すべてのものから温かみを感じた気がする。それが初めて行ったインドという国で懐かしさを感じた理由だと思う。私は自分が想像していたよりもインドの雰囲気や生活に馴染み、心地よく滞在することが出来た。これはすべて私たちのことを第一に考えサポートしてくれたボランティアの学生のみんな、初めて経験するヨガをお手本を示しながら日本語も時々交え教えてくださったヨーガの先生、馴染みのないヒンディー語をいかにわかりやすく教えるか工夫してくださったヒンディー語のお二人の先生方、

楽しみながら英語を使い会話できるようにして下さった英語のお二人の先生方、歓迎会を催して下さった各学部の先生、学生の皆さん、受け入れて下さったVPM大学の方々、ここで挙げた以外にもこの国際文化交流プログラムに関わって下さった全ての人々のおかげである。この国際文化交流プログラムでの経験は今までの人生の中で初めてのことばかりでこの先もめったに経験できないだろう。このような機会に出会えたことにとても感謝している。

2.授業について

(1)ヨーガのクラス

ヨーガの名前は知っていたが、実際にはしたことや見たことはなく、教えてもらうまでどのようにすればいいのか全く知らず初めて経験することだった。はじめは体が硬く、できないポーズもあったが日に日に柔軟性も増し、できるポーズも増えた。先生はヨーガのクラスの中で何度も呼吸について言われていた。腹式呼吸を心がけながらヨーガをしていると、頭がすっきりとし肩が軽くなったように感じた。いくつかのポーズはとても難しくすることが出来なかったが、基本的には簡単で体の疲れが取れるようなポーズになっていた。これからも体が疲れを感じたらいくつかのポーズを試してみたいと思う。

(2)ヒンディー語のクラス

ヒンディー語は今まで一切学んだり聞いたりしたことがなく、あいさつのナマステしか知らなかったため、ヒンディー語の授業がこの研修のなかの大きな不安の一つであった。事前学習で多少は勉強していたため、文字は少し書くことが出来た。しかしパソコンで書く文字と実際にネイティブの人が書く文字の違いに戸惑うこともあった。一番難しかったことは発音する際、日本語と同じ発音の母音もあったが日本語にはない短い発音があることだった。自分では聞いたとおりに発音しているつもりなのにボランティアの人には間違った発音だと何度も言われた。授業中は常に一人一人ボランティアの人が付きっきりで文字の書き方や正しい発音を何度も聞かせてもらい、内容の濃い勉強することが出来た。また実際に授業や会話で使う言葉を中心に習ったため歓迎会で会った学生とコミュニケーションを取るとき自己紹介をヒンディー語ですることが出来、大変役に立った。

(3)英語のクラス

英語の授業では会話・発表やペア・グループワークを中心に行った。発音や会話することが苦手でもうまく伝えることが出来ないで、この授業にとっても苦手意識を持っていた。しかし二人の先生がわかりやすいように噛み砕いて質問を伝えてくれて、面白く楽しめる授業を考えて下さったので、最初に抱いていた苦手意識はなくなっていた。英語の早口言葉である'tongue twister'をした際にはとても難しくほとんど言えなかったが、何度も練習すると少しは言えるようになり、達成感を感じとても楽しむことができた。

(4)インド経済のクラス

私は経済についてまったく詳しくなく事前知識が全くない状態で授業を受けたのだが、先生が日本語をパワーポイントに書いてくださったり、わかりやすいように具体例を挙げてくださったり大変興味を持てる授業だった。

3. Cultural exchange programs

この研修の間、何度もVPM大学の学生たちや先生方がインド独特の舞踊や歌、ヨーガや学生がギターなどで現代的な音楽を披露していただいた。インドの舞踊や歌を実際に見たり聞いたりしたのは初めてのことだったのだが、迫力がすごくあり圧倒された。踊っている途中で、私たち日本の学生を加えていただき、一緒に踊ることが出来、貴重な体験することが出来た。日本では海外の学生を日本に迎えたとしても今回インドの学生の皆さんがしてくれたように日本独自の伝統的なパフォーマンスをすることが出来る学生がほとんどいないと思う。インドの学生はインドの文化的な伝統をしっかりと継承しているということが誇りを持っていることがわかり日本とは違うのだと思った。インドの人たちは歓迎の気持ちをこのようにパフォーマンスで表してくれるのでこちらもお返しをしたいという気持ちになった。お返しというには物足りない気もしたが、私たちはソーラン節とAKB48の「恋するフォーチュンクッキー」という曲を踊った。どちらも踊ったことがなく、運動が苦手なので練習はとても大変でできなかったのだが、披露したときに大きな歓声と拍手が来た時にすべて報われた気がした。見ていた人と一緒にステージの上で踊った時、楽しい時間を共有することが出来たなら言葉は必要ではないと実感した。

4.遠足 (Nashik と Mumbai)

Nashik の石窟寺院は 24 の様々な年代の遺跡が集まっている場所だった。遺跡にはシンプルなデザインのものや仏像が彫られたものなど時代による違いを感じることができた。この石窟寺院を人々は一つ一つ人手作業で造り、そこで修業をしながら生活してきたということに驚くとともに、こうやって石でつられたため後世の我々が見ることができているということにありがたさすら感じた。その後 Panchavati というヒンドゥー教の聖地に行きいくつかのヒンドゥー教の寺院に行った。そこでは現地のヒンドゥー教徒の人と同じようにお参りをすることができた。普通の旅行ではこのように実際に中に入ってお祈りすることは勇気のいることだが、ボランティアの人が一緒に回ってくれて礼儀・作法を指導してくれることによってめったに経験することのできない貴重な体験をすることができた。

Mumbai ではインド門を訪れた。たくさんの観光客とそれを相手にする露天商がおり、大変賑わっていた。ここは入る前にボディーチェックがあったのだがそれは近くにあるタージマハルホテルがテロの被害にあった影響があるのではな

いだろうか。次にガンディーの足跡を辿る資料館を訪れた。ガンディーについては何となくは知っていたのだが、実際に行ってみると知らないことばかりだった。インドの過去の国旗に糸車が使われていたということは初めて知った。ガンディーのようなインドの著名な指導者について知ることがインドの歴史を知ることにつながるのと感じた。ネルーセンターはインドの古代の歴史から独立などのほとんどの歴史について展示してあった。インドの独立などの世界的な歴史については知っていることもあったのだが、古代の歴史や遺跡などは知らないことばかりだった。

5. ボランティアについて

ボランティアの人たちは、ほとんど私たちと同じ年齢で同世代ということもあり、すぐに打ち解けることができた。彼らは英語をとてもうまく話すので英語の苦手な私にも分かりやすい簡単な単語で話してくれたのでとても助かった。上で述べたようにヒンディー語のクラスでは正しい発音の指導をしてくれたり、英語のクラスでは先生の指示や解説をしてくれたり彼らなしでは授業にならなかっただろう。遠足や町中の見学、買い物の際にも常に一人にならないようにボランティアのみんなが付いて回ってくれたことで全く危険な思いをすることなく過ごすことができた。同じ年代の学生であるのに彼らはとても英語の流暢さに然り、しっかりとした目標や夢を持っているという点で私を含めた日本の学生との差を感じた。私たちの研修プログラムは彼らの献身的な協力がなければここまで充実したものにならなかったに違いない。彼らのような友人と出会うことが出来たのもこのプログラムで得た宝物の一つだ。

6. 今後の文化交流について

私は今回の文化研修に参加が決まったとき、少し後悔した。それは自分の英語に自信が持てずインドでしっかりと研修プログラムを遂行することができるか不安に思ったからだ。しかし実際に行ってみるとその不安を感じる暇もないほど様々な出来事が起きた。英語が通じないことも何度もあったが、相手が何とかして聞き取ろうと努力してくれたり、単語を調べながら話したりなどすれば困ることはなかった。これまでは国際交流のプログラムがあったとしても興味があろうと英語への不安から避けることがあったが、今後は積極的に参加したいと思う。

7. その他

スポーツイベントの際、雨天のため室内で卓球をした時、自分は拙い英語でしか話せなかったのだが、楽しく試合をすることが出来たし、終わった時には仲良くもなっていた。スポーツや自分の好きなことを相手と共有するとき言葉を用いることなく意思の疎通を図ることができることを改めて知ることができた。